

進路未決定の構造 ―東京における高校生対象調査の結果から

荻谷剛彦（東京大学）

○粒来 香（東京工業大学大学院）

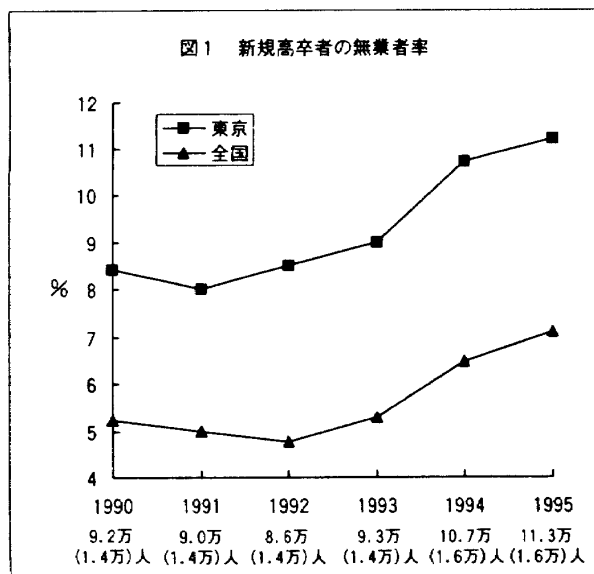
○長須正明（東京都立大森高校）

○稲田雅也（東京工業大学）

1. 問題の提起

「超氷河期」の就職市場を反映して、1996年春に卒業した高校生のうち就職希望者の就職率は、文部省が1976年に調査を開始して以来最低の93.4%にとどまったといわれる。

学校基本調査報告書によれば、進学も就職もしない「無業者」の数は、1996年には11.3万人に達し、高卒者のうちに占める比率においても7%となっている。しかも、図1に示すように無業者層の増加傾向は、「バブル」崩壊以降、上昇している。これだけの量的拡大にもかかわらず、これら高卒無業者層については、十分な注目がされてこなかった。就職難といえば、女子大生の問題がクローズアップされる中で、はたして高校卒無業者層とは、どのような生徒たちなのか。「失業者」なのか、それとも、失業とは異なる進路としての「無業」なのか。また無業者層は、どのように生み出されているのか。



資料出所：「学校基本調査」各年度

進学をめざして浪人をするわけでもなく、正社員になるわけでも、上級学校に進学するわけでもない高校卒業者を、私たちは「進路未決定者」とみなす。そこには、実際に卒業時点で全く進路の決まっていな狭義の進路「未定者」と、定職につかずアルバイトなどに従事する予定の「アルバイト就業予定者」とが含まれる。そしてこれらの「進路未決定者」が、前述の無業者の多くを占めると思われるのである。

これら進路未決定者とは、どのような高校生なのか。どのようなメカニズムで析出されるのか。高校と労働市場との結びつきや出身階層といった要因は、そこにどのように絡んでいるのか。こ

の研究は、従来、日本ではほとんど注目されることのなかった高卒進路未決定者に焦点をあてる。

従来の研究によれば、高卒就職者は、高校における綿密な就職指導と、高校＝企業間の「実績関係」を通じて、職業への「スムーズな移行」を果たしてきた（荻谷 1991）。学校と労働市場とを結ぶ「制度的リンケージ」が、高卒者のようなノン＝エリート層の職業世界への参入に寄与してきたのである。他方、日本とは異なりアメリカでは、リンケージの欠如から、大学進学を予定しない生徒たちが卒業に際して失業やパートタイムの仕事にとどまる「トランジション問題」が深刻であるといわれる。とくに、「一般トラック」の生徒たちにとっては、リンケージの欠如がこの問題をより深刻にしている（Rosenbaum, Roy, and Kariya 1995）。しかも、彼らの社会的背景をみると、エスニック・マイノリティや低い階層の出身者が多い（Kariya & Rosenbaum 1995）。

それでは日本の「進路未決定者」は、どのような構造のもとに生み出されているのか。(1)強固なリンケージを持つ職業科と、その希薄な普通科高校とでは、進路未決定者の生成にどのような違いがあるのか。(2)生徒自身の進路意識の（未/非）形成において、学校はどのようにかわるのか。(3)進路未決定者は特定の社会階層と結びついているのか。このような問題関心のもとに、以下の分析をおこなった。

2. データの概要

図1にも示したが、特に東京では全国レベル以上の比率で無業者が生み出されている。この事実に着目し、私たちは卒業間際の大都市圏の高校3年生を対象に質問紙調査を実施した。以下の分析でもちいたデータは、表1のとおりである。

表1 調査の概要

調査時期	1996年1月～2月
調査対象	東京都内13高校の3年生1804人
	普通科6校 926人
	工業科3校 433人
	商業科4校 445人
	男 子 900人
	女 子 849人
	無回答 55人

3. 未決定者の進路活動・成績と希望

今回の調査対象校では2月以降に実施される一般入試による大学進学者は非常に少数なので、表2に示した進路を、ほぼ確定した進路と考えてよい。これをみると、全体の7%が「アルバイト」、11%

が「未定」となっており、合計すると、全体の18%以上にあたる328名の「進路未決定者」（以下、未決定者）が存在する。都内のどの高校からも未決定者が平均して生み出されているわけではない。普通科の非進学校および職業科で、より多くの未決定者が出現しているのである。

表2 卒業生の進路

進路	普通科	商業科	工業科	全体	実数
4大・短大・浪人	35.2	4.7	9.5	21.5	388
各種・専門学校	27.2	18.2	17.1	22.6	407
正社員就職	12.1	57.1	54.3	33.3	601
アルバイト	7.5	9.2	4.6	7.2	130
未定	12.3	8.5	10.6	11.0	198
無回答・その他	5.7	2.3	3.9	4.4	80
計	100.0	100.0	100.0	100.0	1804

3-1 未決定者の進路活動

高卒者の就職活動は、高卒者に対する求人活動のスケジュールは就職試験解禁日を含めて関係省庁の通達によって定められている（荻谷 1991, 1993）。逆にいえば、そのスケジュールに従わないかぎり、高校生は就職できないことになる。一方、進学者の進路スケジュールは、就職者と比較すればいくらか緩やかではあるが、推薦入試が実施される時期が秋に集中しているため、一般入試の受験生よりもかなり早い時期に受験校を、しかも一校にしぼって決定する必要がある。したがって、われわれの調査対象においては、高校3年生の秋頃か遅くとも12月までに進路が決定されるし、また、決定しなければならないのである。

調査では、春（4-6月頃）・夏（7-8月頃）・秋（9-11月頃）のそれぞれの時点で、どのような進路活動をおこなったかをマルチで質問している。それに対して「とくに何もしなかった」との回答率は、全体で、春67%、夏32%、秋31%となっている。もちろん、この比率は決定した進路によって大きく異なる。たとえば、進路が「正社員就職」では、春61%、夏13%、秋18%であるのに対して、未決定者では、春85%、夏68%、秋79%と「何もしなかった」者の比率が非常に高くなっている。

実際、328名の未決定者の半数を超える53%は、春・夏・秋のどの時点でも進路決定にかかわる活動を何もしていない。逆に、春・夏・秋の3時点すべてで進路活動をしたものが未決定者に占める比率は非常に低く、10%に満たない。活動の内容をみると、そのうちの就職活動はどの時点でも3割程度にとどまっている。したがって、一貫して就職活動をおこなったが結果的に仕事を得られなかった「失業者」は、未決定者のごく一部を占めるにすぎないと考えられよう。以上の考察から、未決定者の大半は、文字どおりの「失業者」ではないことが明らかである。

進路活動をしなければ進路は決定しない。それにもかかわらず、2割近い未決定者のうちの半数以上、すなわち全サンプルのおよそ一割が、まったく進路活動をおこなわず、進路を決定しないで高

校を卒業している。彼ら・彼女たちは、そもそも、どのような進路を希望していたのだろうか。

表3は、3年生の4月段階でどのような進路を希望していたかを決定した進路別に示したものである。未決定者以外では、進学ならば学校名まで、就職ならば職種や業種まで考えていたと回答した、かなり強い希望を持っていたものがほぼ半数、そして、漠然と進学するか就職するかまで考えていたものが約3割となっている。それに対して、未決定者では「あまり考えていなかった」が4割以上を占め、「進学か就職か」が2割強となっている。サンプル全体の8%が、進路を「あまり考えていなかった」未決定者ということになる。

表3 進路別4月の希望（単位：%）

希望/進路	4大短大浪人	各種専門学校	正社員就職	アルバイト	未定	無回答	実数
進学/就職	28.1	28.0	31.8	22.3	25.3	25.0	513
進学	50.5	46.9	4.5	9.2	18.7	13.8	474
就職	4.6	7.4	44.9	22.3	12.1	13.8	382
あまり考えてない	15.5	17.3	18.5	46.2	42.9	28.8	409
無回答	1.3	0.5	0.3	0.0	1.0	18.8	26
計	100	100	100	100	100	100.0	-
実数	388	407	601	130	198	80	1804

つまり、未決定者の多くは高3の4月でも自分の進路についてあまり考えておらず、明確な進路希望を持っていなかった。さきふれたように、高校生の進路活動はタイトなスケジュールでおこなわれる。春の出遅れは、致命的になりうる。そして、夏の時点でも進路希望が明確でなかったならば、卒業時に未決定者となるのも不思議ではない。

3-2 成績と希望

——メリトクラティック／非メリトクラティック

ここでは未決定者の成績に注目する。成績として本人が回答したクラス内での順位をもちい、成績と進路の関係を表4に示した。

まず、成績別の進路をみてみよう。就職は、成績ランクの上位から順に、32%→37%→32%→40%→28%となっており、連続した傾向を示さない。一方、「4大・短大・浪人」が占める比率は、37%→26%→23%→9%→8%となっていて、進学が成績に規定されていることは明らかである。逆に、未決定者の比率は8%→12%→17%→22%→36%となっており、成績が低いほど未決定者が占める比率が高くなる。これは、未決定者の問題に、全体としてはメリトクラティックなメカニズムが働いていることを示している。

成績と進路希望の関係をみると（表5）、「あまり考えていない」の占める比率が成績ランクの上位から順に、14%→16%→22%→26%→41%となっている。成績がふるわないから就職を希望するという図式ではなく、進路を考えなくなる傾向がみられる。これは、学校推薦のシステムと深くかかわっている。これらの高校生は、進学にしても就職にしても学校推薦に依存するしかないが、その

推薦はメリトクラティックに決まる。「ずっとうしろ」の成績では、大学・短大への推薦だけでなく、就職の推薦も得られない。このことを知っている生徒たちにとっては、進学も就職も実現可能な進路とは思えないはずである。実際には、「ずっとうしろ」の成績でも就職先の高望みをせず教師に相談すれば、本来の意味の推薦とは異なるが、就職は可能である。けれども、学校推薦システムが進路決定メカニズムとして支配的に機能している高校では、そのシステムからこぼれた（と自分で感じている）生徒は進路を決定するどころか、希望することさえできなくなってしまうのである。ここから、制度的リンケージが自明であるために未決定者が析出されるメリトクラティックな構造が示唆される。

表4 成績と進路 (単位:人)

成績/進路	4大短大 浪人	各種専門 学校	正社員 就職	アルバイト	未定	計
上位5番以内	96	48	85	8	14	251
10番くらい	97	88	138	13	34	370
まん中くらい	148	156	206	43	65	618
うしろから10番	22	60	96	25	28	231
ずっとうしろ	21	55	76	41	57	250
計	384	407	601	130	198	1720

表5 成績と進路希望 (単位:%)

希望/成績	上位5番 以内	10番く らい	まん中 くらい	うしろ から 10番	ずっと うしろ	実数
進学/就職	26.3	31.8	29.6	29.6	22.5	512
進学	38.2	28.3	29.3	17.1	12.6	471
就職	20.6	23.5	18.1	26.3	21.8	382
あまり考えてない	13.7	15.9	21.7	25.8	41.0	409
無回答	1.2	0.5	1.4	1.3	2.2	23
計	100	100	100	100	100	-
実数	262	378	646	240	271	1797

ただし、メリトクラティックな構造ですべてが説明できるわけではない。進路別にみれば(表4)、未決定者全体で「まん中くらい」と「ずっとうしろ」がほぼ同数で、それぞれ3割程度を占めることがわかる。さすがに上位10番以内のものが占める比率は少ないが、必ずしも未決定者が極端な成績不振者に限られるわけではない。メリトクラティックな視点からみた分析枠組みでは、成績ランク「まん中くらい」の未決定者を説明することはできない。だが、この成績ランクの未決定者の存在は重要な問題である。

成績と希望の関係をみても(表5)、「あまり考えていない」の1/3を「まん中くらい」の成績が占めている。この成績ランクの場合、就職ならば確実に推薦が得られるが大学・短大の推薦は得られない可能性もある。推薦入試を受けても合格するとは限らない。進学をあきらめきれず、かといって就職する決心もつかない状態であろう。このこと自体は特別な問題ではないが、すでにふれたように、彼ら・彼女たちは早い時期に進路を選択しなければならない。進学か就職かの選択が遅れば遅れるほど、未決定者となる確率は高くなるのである。

4. 普通科における未決定者問題

次に、学科ごとの違いをみてみよう。卒業者に占める未決定者の学科別比率は、普通科(20%)>商業科(18%)>工業科(15%)と、普通科でもっとも多くなっている。商業科と工業科をあわせると16%で、やはり普通科よりも低く、この比率の差を検定したところ10%水準で有意であった。また、4月に進路を「あまり考えていなかった」未決定者が卒業者に占める比率は、普通科で9%、工業科と商業科ではそれぞれ7%となっている。普通科では1割近い生徒が進路をあまり考えずに未決定者となっていることがわかる。

普通科は、より多くの未決定者を生み出しているだけではない。未決定者の進路活動は概して不活発であるが、その傾向は普通科においてとくに著しい。未決定者のうち春・夏・秋を通じて何も活動しなかったものの比率は、普通科(57%)>工業科(52%)>商業科(42%)となっている。職業科では、春に活動しなかったものでも約4割が夏には何らかの活動をしている。たとえば20%が夏に企業を訪問し、秋には16%が入社試験を受け、11%は受験する2社めの企業を探している。それに対して普通科では、春の非活動者が夏に活動する割合は2割にとどまり、夏の企業訪問は9%、秋の入社試験は5%である。推薦入試にかかわる活動が10%ほどみられるが、進路活動をしないうまま未決定者となる普通科と、進路(就職)活動をしながらも未決定者となる職業科、というおおまかな傾向が存在するようである。

さきに、成績ランクが下位になるほど進路を考えなくなる傾向を指摘した。そこで、成績が「ずっとうしろ」の生徒を取り出して、その進路決定が職業科と普通科ではどのように異なるかをみてみよう。ここでは、普通科と工業科の男子をとりあげる。4月に進路を「考えていなかった」比率は、普通科53%、工業科36%で、同じ成績ランクでも工業科のほうが進路を考えている。「考えていなかった」ものに占める未決定者の比率をみると、普通科が65%であるのに対して、工業科では42%にとどまっている。たとえ「考えていなかった」場合でも、工業科では進路が決定しやすいのである。その結果、この成績ランクの卒業者全体に占める未決定者の比率は、普通科45%、工業科28%と、大きく異なっている。これは、普通科と職業科では就職にかかわる進路指導が違うことと関係している。第一に、学校が生徒の進路選択に介入する度合いの違いである。職業科においては就職を前提にしているだけに、希望をはっきりさせていない生徒にも就職活動をさせるような指導が可能である。一方、普通科では生徒の進路希望を尊重するが、これは見方をかえれば希望が明確でない生徒には指導が届かないことを意味する。そのために普通科では、進路を考えず、しかも何も活動しなかった未決定者の比率が高くなる。第二に、企業と学校との実績関係というリンケージの強さの違いである。職業科には、強い実績関係を持ついくつかの企業とのリンケージがある。特に工業科では、成績をそれほど重視しない企業と実績関係を結んでいるので、成績の低い生徒でも就職先をみつけやすい。それ

に対して、普通科では実績関係のある企業も少ないので、成績の低い生徒は就職先を見つけることが困難となる。ここに普通科特有のメリトクラティックな未決定者析出構造がみられる。

メリトクラティックな析出構造に加えて、普通科には特有な非メリトクラティックな未決定者析出構造も存在する。そのため、普通科の未決定者比率が高くなっていると考えられる。サンプル全体では未決定者の1/3を成績ランク「まん中くらい」が占めるが、学科別に「まん中くらい」の成績ランクが未決定者に占める比率をみると、普通科39%、職業科31%となり、普通科で若干多くなっている。この成績ランクの普通科の未決定者は、4月にはどんな進路を希望していたのか。40%は漠然と「進学か就職か」を決めていた。次いで35%が「あまり考えていなかった」。「進学か就職か」は決めていたとはいえ、その8割は春には何も活動していない。夏になると3割強が推薦入試にかかわる活動をしているが、6割は何もしていない。就職にかかわる活動は5～6%であるから、「進学か就職か」の内容は大きく進学に傾いていたといえよう。ところが、秋に実際の推薦入試を受験したものは2割に満たない。進学が進路の選択肢として用意されている普通科では、成績ランク「まん中くらい」の生徒が、進学したい気分を何となく夏まで持ち越して、就職活動には手遅れとなり、しかも学校推薦を得られなかったために受験できない、というメカニズムで未決定者が生成されるのではないだろうか。

5. 学校の進路指導からみた未決定者

5-1 学校生活と進路指導

すでに触れたように、今回の調査対象校を卒業する高校生の進路は、その大半が「学校推薦」によって決定する。就職はもちろんだが、進学に関しても、特別な受験準備をしているものは非常に少数であるから、指定校推薦・一般公募推薦を併せた「(学校)推薦入試」を中心とするしかない。推薦基準は、それぞれの高校によって多少の差はあるが、おおむね、(1)成績概評B段階(評定平均値3.5)以上、(2)3年間の欠席日数7日以内、(3)3年間の遅刻20回以内、といったところである。特に、成績と欠席日数に関してはこの基準を満たしていない場合、就職も進学も難しい。逆に、学校推薦を受けられれば「スムーズに移行」することができる。未決定者のほとんどは、その学校推薦をうけられなかったと考えられる。学校推薦に限らず、一般に、進路指導の中心的課題は「全人的な生徒理解を心がける」ことにおかれている。「生徒に対する一面的評価や、その考えに基づく指導は、生徒の全人的発達を妨げることにともなる」(佃 1988)という指摘もある。これは、生徒を「成績」のみで評価することへの批判である。けれども、成績には試験の点数だけを問題にする狭義の「(学業)成績」と、出席状況や授業中の態度、宿題や提出物の提出状況を加味した広義の「成績」とがある。学校推薦の基準は、広義の成績におかれている。それでは、広義の「成績」重視と「全人的な生

徒理解」は両立しているのだろうか。

生徒を全人的に評価する際には、狭義・広義の「成績」だけでなく、学校生活全体を評価することになる。未決定者がどのような学校生活を送っていたのかを、進路決定者との比較のもとに表6に示した。ここには成績に関する質問も含まれているが、未決定者と決定者を比べると、未決定者では明らかに、高校生として「望ましい」生活を送っていた比率が低くなっている。成績が下位で、しかも欠席が多い生徒は、部活動や生徒会・委員会活動に参加する比率も低いので、全人的評価をしようとするればするほど、その評価は低くなる。広義の成績と全人的評価とは、相関しているのである。

表6 学校生活と進路の関係 (部分) (%)

学校生活/進路	決定	未決定	全体
クラブ部長や生徒会役員の経験			
ある	55.1	42.4	52.3
ない	44.9	57.6	47.7
熱心に部活動をした経験			
ある	48.6	32.3	45.7
ない	51.4	67.7	54.2
遅刻をどれくらいしたか			
よくした	25.3	52.7	31.3
ときどきした	28.9	22.9	27.8
ほとんどしなかった	25.6	15.9	23.3
ぜんぜんしなかった	20.3	8.5	17.6
宿題などの提出状況			
よく忘れた	13.8	25.8	16.9
ときどき忘れた	41.2	44.5	41.6
ほとんど忘れなかった	28.5	19.9	26.5
ぜんぜん忘れなかった	16.5	9.8	15.0

学校が進路指導において生徒を「成績」ととらわれず「全人的」に評価する努力をしても、「学校推薦」という学校主導の進路選択・決定のシステムではカバーしきれない、あるいはそのシステムに適応できない一定数の生徒が存在する。その結果として、彼ら・彼女たちが、未決定者として析出される。

5-2 自己選抜と進路指導

学校の進路指導は「生徒の自主的な進路選択を尊重しつつ、なおかつ、与えられた枠に生徒を配分する」(荻谷 1991)ように機能している。このような「生徒の自己選抜」を基本にした学校進路指導においては、生徒の希望の尊重と限られた枠への配分を同時に実現するために、教師は学校推薦の基準に関する情報を折にふれ生徒に伝え、生徒自身がその基準にそって自分にふさわしい進路先を選択するように指導する。

ここでは、学校推薦の基準をどのように生徒に伝え、認識させ、進路選択につなげるかが重要な課題となる。もし生徒が、そのような基準を認識しないとするならば、現在行われている生徒の自己選抜に基づく進路指導は、根本から問い直されることになる。

調査では、就職や進学に関する推薦に関して有利/不利になる条件を、進路決定者と未決定者がそれぞれ、どのように認識しているかを尋ねている。例として就職に関する回答を表7に示した。注目されるのは、「わからない」という回答の多さである。これは、何を意味するのか。

表7 就職に有利(不利)になる条件(部分) (%)

条件/進路	決定	未決定	全体
3年間部活動を続ける			
かなり有利	48.8	42.7	47.7
少し有利	24.7	19.4	23.5
有利にならない	9.0	7.4	8.7
わからない	17.5	30.4	20.1
遅刻や欠席が少ない			
かなり有利	70.7	60.8	68.5
少し有利	14.7	12.9	14.3
有利にならない	3.2	4.2	3.6
わからない	11.4	22.2	13.6
英国数理社の成績がよい			
かなり有利	27.3	27.7	27.6
少し有利	26.4	25.1	25.8
有利にならない	21.7	13.5	20.1
わからない	24.6	33.8	26.4

「望ましい」学校生活を送って高い評価を受けることと、将来との間には「連結性」があることを、生徒がどれだけ認識しているかによって、学校への帰属の度合いは変化する。これまで、日本では生徒の連結性認識が強く、そのため、学校生活における規範も保たれる傾向にあった。けれども、私たちの調査からは生徒の認識が非常に弱いことが明らかである。就職あるいは進学という進路を自分のものとするために、たとえテスト前だけであってもそこそこには勉強し、部活動や生徒会・委員会活動に参加するという従来の当たり前の高校生活は、ある一定の層の学校では現実的なものでなくなりつつある。

6. 未決定者の属性

6-1 父職によって異なる未決定者の割合

進学率が普通科は高く職業科では低いが、この点に関しては父職による差はみられない(表8)。普通科の進学率が最大なのは専門管理であり、以下ホワイトとブルー、自営が同程度の水準で、父親のない生徒で最低となっている。一方、職業科で就職率が高くなるのは、父職ブルーである。以下ホワイト、自営の順となり、もっとも低いのは専門管理である。未決定者の比率は、職業科の自営でも15%を越えている。いざとなれば家業を継げばよいということなのだろうか。

未決定者には、アルバイトと未定者の二つのサブカテゴリーがある。アルバイトではホワイト比率が低くブルーが高い。一方で未定では自営の比率が高いなど、未決定者内部でも父職別に進路の違いが確認される。今回、対象者には父親がいない生徒が約10%含まれているが、彼らの20%近くが未決定者である。

表8 父職別、学科別の進路(全生徒)

	全体%	進学 46.4%	就職 34.6%	アルバイト 7.6%	未定 11.4%	未決定 19.0%	実数
自営	普通	61.7	12.6	8.4	17.3	25.7	190
	商業	22.2	54.5	10.0	13.3	23.3	90
	工業	34.8	47.8	4.4	13.0	17.4	92
専門管理	普通	75.1	6.3	5.9	12.7	18.6	253
	商業	41.0	44.9	5.1	9.0	14.1	78
	工業	40.0	45.0	2.5	12.5	15.0	80
ホワイト	普通	64.7	13.8	7.8	13.8	21.6	116
	商業	24.5	60.4	7.6	7.6	15.2	53
	工業	28.3	60.9	4.4	6.5	10.9	46
ブルー	普通	64.7	18.2	9.9	7.2	17.1	181
	商業	12.5	68.0	11.7	7.8	19.5	128
	工業	18.8	64.1	7.7	9.4	17.1	117
その他	普通	60.5	18.6	4.7	16.3	21.0	43
	商業	44.5	33.3	22.2	0.0	22.2	9
	工業	18.5	70.4	3.7	7.4	11.1	27
父なし	普通	58.0	17.4	11.6	13.0	24.6	69
	商業	12.8	72.3	8.5	6.4	14.9	47
	工業	24.4	58.5	4.9	12.2	17.1	41

6-2 進路未決定者と成績——自営だけはイメージ通り

3-2でも触れたように、未決定者には成績中位者もいれば下位者もいる。図2は進路未決定者の成績の分布を、父職別に示したものである。凡例で「全体」とは、決定者を含めた対象者全体(1804名)のクラス内での成績分布である。特徴的なのは自営の分布である。全体分布と比べ下位者側へのシフトが大きい。この自営の分布は、これまで未決定者について描かれてきたメリトクラティックな未決定者析出のメカニズムのイメージに近い。それに対してホワイトでは10番以内の未決定者比率が、全体平均を上回っており、非メリトクラティックなメカニズムがより強い可能性を示唆している。

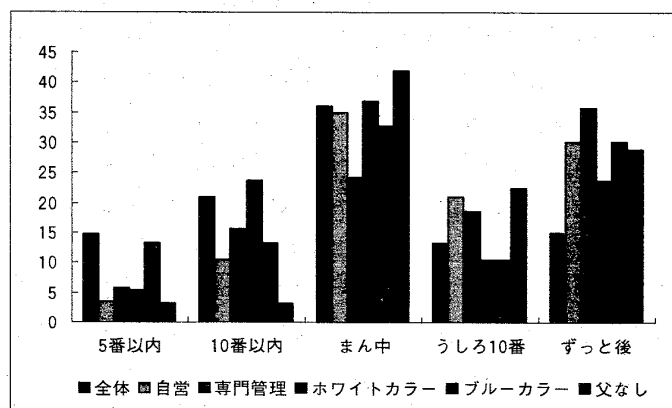


図2 進路未決定者の父職別成績分布

6-3 バイトと未定の分水嶺——性別と父学歴

階層研究の分野などで、父学歴と本人進路には関連があると指摘されてきたが(尾嶋 1990など)、学歴別では未決定者のサブカテゴリー間に特徴的な傾向がみられる。全体でも学科別でも未決定者のうちアルバイトの父親は、高校卒業までである比率が高い。それに対し未定者では、逆に大学、短大、専門学校の卒業者(以下大短専卒と表記)が過半数を占める。普通科の未決定者は、ア

アルバイトは高校卒業、未定では逆に大卒者が多い。職業科の未定者でも大卒者層の比率は高い(表9)。父親の学歴を普通科で男女で比べると、男子では高校卒業までの未定者比率(13.3%)が高く、女子では大短専卒が多い(14.7%)。また、普通科ではアルバイトの男女差はみられないが、未定者では各学科とも男子の方が女子よりも比率は高い。

表9 父学歴別、学科別進路(全生徒)

		進学	就職	アルバイト	未定	合計	実数
高等学校まで	普通	65.3	13.8	10.1	10.8	20.9	426
	商業	22.2	62.4	7.9	7.5	15.4	252
	工業	27.7	58.7	6.1	7.5	13.6	213
大学、短大、専門学校	普通	73.6	8.0	5.0	13.4	19.4	299
	商業	40.0	41.5	10.8	7.7	18.5	65
	工業	35.1	46.7	3.9	14.3	18.2	77
その他	普通	54.1	19.6	7.4	18.9	26.3	148
	商業	16.9	59.3	11.9	11.9	23.8	118
	工業	23.0	58.7	3.2	15.1	18.3	126

以上のように進路未決定は、階層や属性だけでは説明されないことがわかる。

7. 未決定者の進路観——行動と意識の合わせ鏡

前節、前々節までの比較により、成績不振者も含めた様々なタイプの未決定者が存在することがわかる。また、未決定者がアメリカでみられるように、たとえばブルーカラーから必ずしも多く発生するわけではないことが示唆された。

だとするならば、未決定者発生のプロセスには、成績や階層に還元されない別の次元を考えることができよう。そのひとつとして未決定者の進路意識を取りあげる。ただし、進路意識については進路行動の結果、特定の意識を持つに至ったとも考えられ、原因と結果を厳密に区別することは困難である。

調査では進路意識を大きく「将来観」、「自己評価」、「進路決定に関する規範意識」、「能力観」の4つに分類している。各設問群から進路決定者と未決定者との回答に、違いがみられる設問に着目した。

7-1 将来観と自己評価——今を大切にする未決定者

将来観と自己評価で決定/未決定者の違いがあらわれた設問は、以下ようになった(表10)。

表10 進路決定者と未決定者の将来観

			とても思う	まあそう思う	あまりない	全然思わない	実数
将来のことを考えるより今を楽しく生きたい	決定	普通	14.5	34.9	39.4	11.2	690
		商業	15.3	35.9	41.5	7.3	354
		工業	26.0	32.0	31.7	10.3	350
	未決定	普通	23.5	33.3	35.0	8.2	183
		商業	26.9	39.7	26.9	6.4	78
		工業	30.3	33.3	25.8	10.6	66
はじめに入った会社をずっと続けたい	決定	普通	28.2	39.5	24.2	8.1	689
		商業	29.7	46.3	18.6	5.4	354
		工業	32.4	33.5	21.5	12.6	349
	未決定	普通	13.2	38.5	38.5	9.9	182
		商業	25.3	34.2	31.7	8.9	79
		工業	13.6	31.8	31.8	22.7	66

「将来のことよりも今を楽しく生きたい」、「はじめに入った会社をずっと続けたい」という二問である。時間選好に関する対照的な設問だが、前者では未決定者に強く肯定する者が多く、後者では逆に決定者に支持される比率が高い。これは進路が未決定なために、将来のことを考えたくはない意識の現れとも受け取れる。しかし現在のことだけを考えても生活することはできるという、現代社会の豊かさのひとつのあらわれという見方もできるであろう。

7-2 進路決定の規範意識と能力観

「日本社会では学校成績で将来が決まる」という意見で、各学科で未決定者と決定者の差がみられた(表11)。この質問は、5. でみた学校側の進路指導における前提を、生徒の側がどう受け止めているかをうかがわせるが、成績との3重クロス表から、これは成績と直接的な関連性は持たないと思われる。

表11 進路決定者と未決定者の進路決定における規範意識

			とても思う	まあそう思う	あまりない	全然思わない	実数
学校の成績で将来が決まる	決定	普通	46.2	34.5	14.5	4.8	689
		商業	43.9	33.5	18.0	4.5	355
		工業	42.9	32.6	16.0	8.6	350
	未決定	普通	55.2	30.1	10.4	4.4	183
		商業	50.6	27.9	15.2	6.3	79
		工業	66.2	13.6	9.1	12.1	66

能力観に関する設問では、進路決定者と未決定者の間に(1)「勉強の成績は能力ではなく努力で決まる」、(2)「出世するかしないかは能力の問題だ」において違いがみられた(表12)。普通科の決定者では、(1)について「とてもそう思う」とする比率が未決定者より高いが、逆に職業科では未決定者の方が高くなっている。普通科特有の未決定者の析出メカニズムと関連している可能性が考えられる。

表12 学科別進路決定と未決定者の能力観

		学科	とても思う	まあそう思う	あまりない	全然思わない	実数
成績は能力ではなく努力で決まる	決定	普通	43.9	43.6	10.4	2.1	676
		商業	42.4	48.9	8.5	0.3	355
		工業	40.2	42.8	11.2	5.8	348
	未決定	普通	38.5	46.2	11.0	4.4	182
		商業	44.3	43.0	11.4	1.3	79
		工業	53.0	31.8	9.1	6.1	66
出世するかしないかは能力の問題	決定	普通	7.2	20.2	43.1	29.5	678
		商業	5.9	18.6	53.2	22.3	355
		工業	14.3	19.8	40.1	25.8	349
	未決定	普通	6.6	26.5	44.2	22.7	181
		商業	5.1	16.5	46.8	31.7	79
		工業	16.7	15.2	37.9	30.3	66

8. まとめと今後の課題

未決定者には、いくつかのタイプが存在し、それぞれ析出される構造も異なることが示唆された。今後は、未決定のタイプと析出構造の対応関係を明らかにする予定である。さらに生徒自身の家族との関係などにも着目した分析も必要であろう。